

俊乗坊重源の事蹟と其の思想

守屋茂

その時代

俊乗坊重源は、紀長谷雄十二世季重の子として産れ、俗名を重定といい、土御門天皇建永元年（一二〇六）六月四日に八十六歳を以つて入寂した。入寂の年から逆算すれば鳥羽天皇保安二年（一二二二）に生誕したことになる。

重源は東大寺大勧進となり、その復興を畢生の事業として之と取組み、旁々之に関係ある有縁の地に、その時代に於て叡尊・良観と並び称せられる程の慈善救済の事蹟を貽したのであるが、どうして彼はこの仕事のために起たねばならなかつたのか、重源の事蹟とその思想とを究明するに先だち一言之にふれておきたい。

聖徳太子はさておき、その後の日本仏教は太子の思想と行実とを思慕・敬仰し乍らも、一重に舶載仏教の研究と普及との為に汲々として夜を日に継ぐ有様であつたが、漸く平安朝に至つて最澄・空海等の新人を加へて一新紀元を画し、上は皇室から下は一般庶民に至るまで、何事に於ても仏教と結びつけられぬものはない迄に行渡つた。

国民の上下に滲透した仏教は勢い政治は仏教を利用し、仏教は政治にたよるといふ密接不離の關係におかれて、現世的傾向を馴致せしめることになり、民衆の窮乏化を阻止する政治的手段の空隙を補填する役目をも負わなければならぬ羽目に追込まれて失つた。つまり相互に利用される關係にたつた以上政治の貧困に対しても拱手傍觀が許されぬこととなつたのである。

平安末期から鎌倉初期へ移行する過渡時代に於て、天台座主として（一一九二―一二三五の間）前後約九年の間宗団の統帥に当りつつ、護持僧として禁裡に伺候する慈鎮が物した『愚管抄』に、百王を期として絶えず盛衰を繰返して行くものであるとし、「百王を数ふるに今十六代はのこれり」と末法思想をふりかざせしめたのは、強ち文学的表現のあや許りではなかつたのではなからうか。

儒教思想を基とした聖王賢相の善政も、既に空文化して、重源が東大寺大勧進として活躍中の頃九条兼実と源頼朝との公武首脳者の施政會談に於ては「天下遂可直立政何不反淳素哉」（『玉葉』）といわしめるに至り、爾來幕府は明確なる社会認識の下に意識的に計画的に

之を推進せねばならない必要に迫られていた。それからあらぬか『増鏡』に後鳥羽天皇の治政の有様を記して「帝偏に世をしらしめして、

四方の海なみ静に、ふく風もえだを鳴さず、世治り民やすくして、普き御うつくしみの浪、秋津島のほかまで流れ、しげき御恵筑波山のかげよりも深し。万の道々にあきらけくおはしませば、国に才ある人おほく、昔に耻ぢぬ御代にぞありける。」と言つてゐるけれども、延喜の治にして、尚三善清行として課役・租税を免れんとして諸寺の年分、或は臨時の度者が毎年二三百人に及び天下の人民三分の二は皆禿首と歎息せしめた程の状態であつた所から見ると、『増鏡』の著者が讚へる程のことはなかつたのであろう。即ち窮乏した零細な農民は限られた農地を基として、一部は二毛作に頼り乍らも、農業技術の發達と経営の集約化・多角化を目指して進む一方、未進と逃散等消極的な抵抗で事を済まし、臆て抬頭する団体的行動を前にした嵐の前の静けさといった状態におかれていたのではなからうか。何れにしても手放して謳歌出来るような泰平の世ではなかつた。重源はこういう時代に人と為つて、然も東大寺再建という大事業を担当し旁々多くの慈善救済の事に従うた。今や「夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也」(『後日本記』)という勢を以て大仏の造営に当るといふことは出来なくなつていて、如何しても民衆の力を藉らなければならなかつたのが重源出世の因縁であつて、又其の事業を進めるためには、何としても民衆の福祉を考へつつ行ふということが、不可避の情態ではなかつたのではなからうか。

仏法修行の前半生

重源弱年の動静は詳かでないが、長承二年(一一三三)十三歳の時^{註①}初めて醍醐寺に入つて重源と改め、「上の醍醐の禪徒にて、真言の薰修ふかかりける」(『法然上人行狀画図』)の通り、専ら密教修行に専念していたものの如く、その模様は重源自ら「於上ノ醍醐一千日之間無言転読六時懺法」し、或は「於上下、構道場十一所・翻三百余人請僧一如法経、一日奉書写供養」又「於上下醍醐奉書写如法経一度々」と記している様に書写・転読等に勤め(『南無阿彌陀仏作善集』引用註のないもの以下同じ)ていた。かくして約三ヶ年の日子を過した彼は、更に相模国笠屋岩宮、筑前国箱崎(筥崎)八幡宮に、或は紀伊国那智神社に如法経を書写し奉納することに数年を費し、十七歳の時には四国の辺を遍歴修行し、十九歳の時初めて大峯山に登ること五度、その内三度は深山に紙衣かみえを採取し料紙を調べて法華経を書写し、二度は持経者十人を携えて峯内及び熊野に大日経千部を転読し、又御嶽に作礼而去の文を、葛木に二度千部法華経を讀誦し、更に又信濃国善光寺に参詣し、一度は十三日の間に百万遍と、一度は七日七夜不断念仏を勤修し、或は又は白山、立山に参籠し如法経の書写、転読、不断念仏等を修する等青年時代から練行には最も力を傾注していた。

文治元年(一一八五)八月廿二日、彼が六十五歳の時大仏の腹中に納めた願文によれば「伏して惟るに、仏子早く二恩の懷を出でて、久しく一実の道を求め、初は醍醐寺に住し、後高野山に棲ひ、靈地名山の処々、春草纒かに孤庵を結びて巡礼修行し、年々秋月を只親友と為

す」と、往時を回顧しているが如く（堀地春峰述俊乗房重源上人と東大寺再興『重源上人の研究』所收）靈地名山を行脚し、深く密教に傾倒し、行者的な身心の修行に専念していた事が窺知せられる所から見ると、彼は所謂學問僧ではなく、行基・空也の如く都鄙山川を拔渉し、山里に遊行して仏法を説き、写経・鑄鐘さては不断念仏等に結縁度生する遊行乞食する僧侶であつた。

ここで最も注目すべき事柄は十二歳で得度した青年僧がたとえ（南都北嶺の影響をうけて）修行僧を敬重する当時の世俗とは云え、醍醐に於ける道場十一ヶ所に百余人の請僧を配置しての写経事業や、大峯山の経持者十人に要する淨財が青年僧重源に供養されたことを思えば、彼に対する世俗の信仰は又格別のものがあつたと見ることが出来るであろうし、又其の供養を受けた彼は「後世をおもわんものは糶林瓶一もつまじき物とこそ心えて候へ。」（『一言芳談抄』）と語る等の清貧を以て終始した程であるから、夫等の淨財は最少限度の生活を支えるの外、専ら仏事供養の資に充てられていたものと考えられる。

重源は斯くして各地を巡行し広くよき師よき朋を需めて修行に勤めたが、其の間又彼の生涯に於て影響の最も多い源空との関係も生じていたことも考えねばならない。彼は上醍醐寺に於て出家得度して専ら「習ニ学密教ニ」すると共に、「後随ニ源空ニ、受ニ専修法ニ、遊ニ行畿内ニ、勸ニ掖淨業ニ、」（『本朝高僧伝』）したのである。治承四年（一一八〇）東大寺炎上の際の如きは「忽出ニ高野山ニ、詣ニ大仏殿ニ」（『東大寺造立供養記』）でて居り、東大寺造営のために大勸進の職に補せられた時には源空より「醍醐の俊乗房重源を挙申さ」（『法然上人行狀画図』）れる程

の事を伝えられている。然し源空の推挙は完全なる師資相承の下に於けるそれではなく、飽く迄上醍醐に於て密教修行と共に念仏利生に努めている重源其の人在つたものの如く考えられる。彼は仏法修行に努めると共に安元二年（一一七六）二月尼大覚が僧照静、同聖慶、源時房、尼妙法の菩提の爲め高野山延寿院に鐘一口を寄進するに當つて彼自ら勸進となり、又信濃遊行の途次であろうか治承三年（一一七九）十月大仏師武藏講師慶円が同国藤尾覚園寺の千手観音像を造立するに當つては、「小仏師重源」（同国大平寺千手観音胎内木札銘）とあり、或は重源其の人ではなかるうかとも考えられている。治承四年（一一八〇）大仏炎上までの全半生についての史資料は充分伝えられていないにしても、或はそう云つたことに明暮していたのではなかるうか。尤も重源の活動・業績に関してはその総決算として『南無阿弥陀仏作善集』がまとめられているのであるから一応夫等主要なるものを尽しているものと見ねばならない。即ちその『作善集』の結構を考えるのに、先づ第一に、造立・修複に係る大仏・仏像の員数を掲げ、第二には直接関与したる東大寺造営のために造立・修複に係る大仏・仏像・仏殿・堂塔・附属舍等を挙げ、第三には結縁のために大和は勿論山城・紀井・伊賀・播磨・摂津・備中・備前・周防等各国に於ける造立・修複に係る仏像・堂塔・湯屋さては鑄造の鐘等を挙げ、第四には上醍醐寺を始として、高野・大峯・御嶽・善光寺等に於ける写経・転読さては念仏の修行を述べ、第五には東大寺造営のため第二に掲げた記述の補遺と認められる部分について加筆し、最後の第六には公益のために尽した数々の事業を列挙し、中には結縁のために安置・施入した仏像経巻等

をも掲げ、一応体裁としては纏っている。そこで推断を下して観察して見ると、青壯年時代は勿論そうであつたであろうが、六十一歳にして造東大寺勸進の職についてから八十三歳に至る迄の二十三ヶ年の日子は、尽日東大寺造営のために奔命、日も是足りない有様であつて、以前の様に余り出遊も出来なかつたかも知れないが、重源の性格から考えても中央地方往還の途次或は巡行等に當つて仏法修業に勤めつつ大仏・仏像・堂塔等の造立・修復に加うるに幾多の公益の事業を計画実施していたものと考えられる。『作善集』に於ける記述は一応数項に弁別して見ることが出来るにしても、それは必しも年次的に事項をとりまとめて記述されているというわけではなく、項目別に年次を逐うて記載されているように想われる。然し第四に掲げている写経・転読等の修行の中に於ける八幡宮・春日社及び伊勢大神宮に対する大般若経の奉納・写経供養の如きは、取りも直さず東大寺造営のための祈願（東大寺造立供養記）ではあるが、東大寺関係のものだけが必ずしも一括して第二に列挙してあるというわけではない。周防や備前に於ける業蹟の如きは、或は専ら東大寺の事に従つてからのことも考えられ、又其の他の国に於けるものの大部分は、概ね六十歳前仏法修行中に行われたものと見ることも出来るであろう。

又かの入宋三度の如きまさに壯年時代であつた。仁安二年^{註③}（一一六七）入宋、『高僧伝』翌三年五月丹丘にて偶々榮西と遇い、『高僧伝』には四明とする。相伴うて天台山上り、阿羅漢を拝すると共に『元亨釈書』次で明州（今の寧波）に還つて育王山に参詣して仏舍利を拝し、『高僧伝』其の歳九月榮西と共に帰職を理めて帰朝（『元亨釈書』）した。尚この時が何時か明らかでないが、名刹天童山にも上つ

たであろうことが、天童山仏殿の構築が重源の採用した天竺様式に近いものがあるということ（常盤大定博士著『支那仏教史蹟踏査記』）によつて窺われる。又「壯年当初入唐三度」（『造立供養記』）は、仁安二年（一一六七）の入宋のことがあつてから安元二年（一一七六）まで十年の間に「入唐三度」（『延寿院鐘銘』）であつたのか、或は仁安二年以前にもあつたことを含んでいるのか定かでないが、おそらく前者の通り解することが妥当のことであろう。が然し又一面建久七年（一一九六）東大寺中門の石獅子、堂内の石脇土、同四天像を宋人の六郎等四人が造作するとき日本内地に於ては其の石材を需めることが出来ないのので宋から買入れ、その運賃雑用に莫大の費用（凡三千余石）がかかり、斯る大事は嘗てないことであつて、これに十有余年を費している事（『造立供養記』参照）や、東大寺の建築に當つて事の必要上重源の創意工夫による天竺様様式（大同実述重源上人と天竺様『重源上人の研究』所收参照）であるとは云え、天童山仏殿に於ける様式が重源のとつたそれに近いものがあり、又高野新別所に安置した阿弥陀三尊像や、河内国に安置した阿弥陀仏像は唐仏で十六羅漢は唐本であり、播磨別所と伊賀別所の丈六像は唐仏を本様として造られたらしく、施入の阿弥陀三尊像は唐筆であり、又伊賀別所及び国見寺には奉模作の画像も施入し、又東大寺別所に唐本の一切経を寄進している事等からして「入唐三度」以上の入宋の事があつたのではなからうか、殊に「二階三閣之精舎也其最中一間弘三丈也。」である所の育王山の舍利殿が「破壊年久、當作失便」（『造立供養記』）するとき當つて、周防国の材木を運んで舍利殿を建立し、更に之が修理に充つる為めに柱四本と虹梁一支とを送つた所育王山では、重源の影響及び木像を用意して先徳の列座に安

置き、剩え多くの施物があり是等の施物は二箇国の所當にて匹敵する程のものであつた(『作善集』『造立供養記』参照)ということについて、施物の当否は別としても、先進地と目せられる宋に於て、然も先年參詣して無上の感激にひたつたであろう所の大寺の舍利殿を建立するに當つて、材木を寄進する事だけで満足されるわけのものではなからう。そして又その影像、木像共に先徳の列座に安置される程の感激を持たれたこと等からすると、必ずや彼も入宋して事の面倒を見たものではなからうか。殊にこの時の寄進の材木は周防国のものを充てている(『作善集』)ことからして、仁安二年入宋の際に於ける出来事(『重源上人の研究』略年譜)ではなく、後年彼が周防国で活動していた時のこと(小林剛博士述俊乗房重源の肖像について『仏教美術』23所収)と考えねばならぬ。文治元年(一一八五)八月大仏の開眼供養の際の願文によれば、寿永元年(一一八二)鑄匠陳和郷相見のため鎮西に下向する(西村貞述鎌倉期の宋人石工とその石彫遺品について『重源上人の研究』所収参照)等の重源にして見れば、生涯をかけての東大寺造営のためとあらば、千里を遠しとせずして入宋することもあり得たことと考えられる。榮西の如き仁安三年四月十八日に日本の商港を出発して同月廿五日に明州に到着している(諸岡存博士校註『喫茶養生記』附録宋西禪師略年譜参照)程であるから、海路順調の時であつたならそう大した日子は要しないし、且新文化の輸入のため勇敢で敏速であつた重源の性格をも併せ考えれば宋との往復も蓋し三度以上に及んだであろうことも強ち之を否定することは出来ないであろう。

造東大寺大勸進としての重源

今重源が生涯に於ける事蹟の中で東大寺の造営の事は何としても彼の圧巻に値するものである。治承四年(一一八〇)十二月二十八日東大寺が平重衡の兵火のために烏有に歸したので、朝廷に於ても再建の議がもち上り、翌五年六月藤原行隆を造寺長官とし、源空を大勸進にしようとしたが固辞したので、終に弟子重源をして之に當らしめることになつた。(『法然上人伝記』参照)と伝えられて居り、又重源自身も東大寺罹災前後より造東大寺の衝に当たりたいという熱望があつたとも見られている。(『東大寺統要録』参照)元米東大寺側の史料に於ては藤原行隆が造寺長官となつた翌養和元年四月、重源が行隆を訪ねて再興の心緒を述べたことによつて、後白河法皇の重源接見となり、大勸進職補任となつた(『造立供養記』参照)ので源空は介在していないことになつているが、又一面かねてから源空の浄土一門として、直接法談に接すると共に、諸國を行脚して念仏浄土の普及に努めている重源を起用するに當つて、源空に断りなくして行うことの當を得ていないことを以て、一応源空に院宣の沙汰を下すことになつたので、源空の辞退は重源の熱意を付度しての臨機の措置に出たものであつた所から「重源左右なく領状す」(『法然上人伝記』)という事になつたのではなからうか。

重源が源空と関係の深かつたことは、「上人の徳に歸して往生をねがひ。師資の礼をあつく。」(『法然上人行狀画図』)し、「かの故山上の醜醜に。無常臨時の念仏をすすめて。末代の恒規とし。」(『前掲書』)平素又念仏浄土を行実とする所からしても諾われる所であるが、又入宋の際源空の懇懇によつて浄土五祖の影像及び觀經曼荼羅の將來(前掲書参照)や、文治二年の秋頃源空が大原に止住の頃の便りによつて

上醍醐にあつた重源は弟子三十余人を相具して大原に行つて（前掲書参照）法談をしている事や、寿永・元暦の頃源平の乱による死者の菩提を弔うために道俗をすすめて七日の大念仏を行つた時、未だ念仏の趣旨が徹底しなかつたのを憂い、建久二年の頃源空を招じてまだ工事中の東大寺大仏殿の軒の下で、宋から將來した浄土五祖影像、觀経曼荼羅を供養すると共に、浄土三部経を講ぜしめた（前掲書参照）事等が伝えられていることは、たとえ夫れが源空側のみ伝える説にしても之を否定し去ることは又根拠のないことであつて、然も彼重源の行実が念仏によつて充たされているということに於ては尚更の事である。

又東大寺再建という大事業を遂行するに當つての大勸進の職を重源に選んだということについては、既に述べた通り、推挽や切望がたとえその誘因となつたとしても、彼重源の信仰・力量に基因していること云うことも見逃がすことの出来ない事實である。弱年の頃より六十一歳に及ぶ四十年の間専ら諸国を行脚して念仏浄土の普及と共に、六十年に亘り拮据經營して来た幾多の公益事業によつて中央地方の道俗を濟うて信を一身にあつめ、剩え南都・北嶺の真言・天台の中にあつて、新興仏教たる念仏浄土を以て起ち、自らは阿弥陀仏又は聖人と号し、九条兼実をして又「此聖人之体、実無_レ傍詞、尤足_レ可_レ貴敬_一者也」〔玉葉〕と云わしめる程の名実共になる「おほかたによるづにはかりごとかしこき人」「支度第一俊乘房」（法然上人行狀画図）を最適任者として朝野一致の結果、重源に落着いたものと考えられる。

又一つには東大寺別当は從來華嚴宗出身者を以て充てられていたのであるが、弘仁元年（八一〇）始めて空海が十四代東大寺別当に補せ

られ「東大寺真言宗始也」とされたことによつて、漸次真言の勢力が強くなり、廿三代真雅、廿四代貞宗共に真言出身であつたが、四十代延叡は本寺東南院を開いて三論の本所とし、又醍醐寺をも開創して三論真言の兼学化が進められることによつて、後東南院や醍醐寺からも別当になるものが輩出する様になつて、〔東大寺別当次第〕、田村円澄述重源上人と法然上人「重源上人の研究」〔所收参照〕東大寺に於ける密教勢力もあなどり難く、又一方東大寺嚴密己講の建立に係るものと伝えられる山城の光明山寺が、南都浄土教の中心となつてその浄土教化の力も強く、又重源が東大寺別所を此処に置き湯釜を施入する程の關係もあり、順調に事を進めるためには密教浄土兼学のものが適任であるという輿望の下に真言密教を醍醐で学び、旁々不断念仏に帰依している重源に白羽の矢がたてられたということ（田村円澄述前掲書参照）も併せ考えねばならない。

斯くして重任を背負うた重源は、一輪車六輛を作つて多くの勸化僧と共に之を六道に配し自らも之に乗り、治承五年六月の東大寺造営の勅書を捧して天下を周遊し、只管勸化結縁に努め、多くの賛助を得るに従つて、逐次大仏の部分的鑄造に着手した。当時の勸化僧は寿永二年五月の奉鑄供養の際の如き、大勸進以下同朋五十余人という多勢に上つていたので、其の外に各国勸化中の同朋もあつたことであろうから、その総員は相当数に上つていたものと考えられる。

殊に律令国家の崩壊は、中央地方を通じて官寺の没落を促し、多くの官寺の中には東大寺の末寺となつたものもあつたが、その東大寺も氏人の扶持がなくなつてその修造さえ意う様にならなくなり、漸く勸進

僧の活動により庶民層との直結の下で漸く寺院活動が開かれる事となつた。(田村田澄前掲書参照)重源も是等勸進僧につながる一人であつた。従つて是等勸進僧による勸化も進捗してゐたことであろう程に、諸国は源平の乱後のこととて疲弊も甚しく之とても仲々の難事でもあつて、重源は時に伊勢大神宮に将又春日八幡両社に祈願をかける外、後白河法皇に請うて周防・備前両国を造東大寺領とし、兼ねて將軍源頼朝を説いて、諸国の守護・地頭をして結縁せしめる等の方法により、只管勧進の進捗に努めた。周防に在つて山に杣入する際の如き、同国は源平の乱によつて庶民疲弊し「夫者売妻。々者売子。或逃亡。或死亡。不知_レ数者也。纔所_レ残百姓者存者亡。」(『造立供養記』)の状態であつたので、重源は先づ船中の米を施行すること数度、山に入つて木を求めんに「柱一本別可_レ賜_三米一石云云」を以てし、或は作物の種子を与え(前掲書)或は又盲目の母を養う孝子の食糧の資難を免じて、彼に米等を与えて小間使にする(『沙石集』)等事を進めるに當つても住民の困苦を救済することを忘れなかつた。求める所の柱は長九丈十丈或は七丈八丈、口径五尺四五寸という大材であつて之を動かすのに轆轤二張、之に要する人夫七十人、轆轤に用うる大綱は綱口六寸長さ五十丈、綱一丈を持挙げるのに人夫五十人、若し轆轤がなかつたならば千有余人の人夫を要するという有様であつて、剩え折角伐木しても用を為すものは数百本の中十本廿本という惨めな状態であつた。選択した材木を運搬するためには専ら佐波川の水運を利用したのであるが、山より海に至る間七里、然も水が浅いので中途百十八ヶ所河を闊いて水を湛え、或は新に河を掘る等して漸く三ヶ月にして海に

至り、海上は葛藤を以て筏を組み、或は船四艘を柱の本末につけて浮遊せしめる等のことによつて運搬し、泉木津についてからの陸路は柱を大力車に載せ牛百二十頭で之をひかせるという(『造立供養記』参照)様な難事業も矢張りの「支度第一」の重源の創意工夫し指導監督する所であり、又直接大仏の設営についても極力配意する所であつた。

然し乍ら時しも源平の戦後社会の混乱してゐた時であつたので、事は意のままに進捗しなかつた。文治四年三月思ひあまつた重源は愈々頼朝に対して事の由を述べて協力を懇請、更に頼朝から後白河法皇に上申することとなつたので遂に頼朝に院宣が下り、(『玉葉』参照)頼朝の配意によつて一時順調に進捗したものの、疲れ切つてゐる社会の情勢に対しては如何なる権力沙汰と雖も到底永続すべくもなく、文治五年(一一八九)八月重源は九条兼実を訪ねて周防国が造東大寺料に充てられてゐるとは言うものの、地頭の妨害と対捍、夫役・麻苧の欠乏によつては到底造寺の事は完成し得ないので勸進職を辞退したいと申出でたので、兼実は再三之を制止して少康を得てはいるが(『玉葉』参照)重源の努力は並大抵のものではなく、異常なる造寺熱にかりたて乍らも、時には右述べた様に職を離れようとした事もあつて、彼の苦衷は如何ばかり大きなものであつたか判らない。重源の不断の熱意と努力によつて一応造寺の事は進捗しつつあつたので、朝廷は重源を東大寺檢校に補任しようとしたが之を受けないので、やむなく建久六年(一一九五)三月伝燈大法師重源を大和尚に補任(僧官補任)した。辞退したいのに大和尚補任を以て激励せられた重源は内心非常に苦慮したものの如く、同年五月曩に近江国多賀神社に大仏造営の功が畢え

る迄延寿の祈願をしていた所が、漸く所願成弁したので石印を寄進して居り〔多賀神社石印銘〕乍ら、又同月高野山に逐電、頼朝の誘仰によつて半月余にて帰来〔『吾妻鏡』参照〕する等によつて見ても、畢生の努力を傾注し然も尚且權勢の協力は充分であり乍らも、一般的社会の情勢は如何ともする事が出来ず、成長し切らない初期封建性の葛藤の中に苦闘せねばならなかつた。

又斯様に造寺の功を急ぎつつも一方又中央地方の公益の事は忽諸にせず、殊に地元大和は勿論のこと周防国・備前国は造東大寺料として直接資材の供給地でもあつたので、格別留意する所があり、夫等の国に於ける事業はおそらく、重源が国司として行政に関与している間に着々進められたものと考えられる。

斯くして非常に困難なる社会情勢の中に在つても、一途に東大寺造営の事に従いつつ、且公益の事に奔馳し乍ら、漸くにして建仁三年（二一〇三）十一月大仏、仏殿等の完成を得て総供養を行い重源一代の面目を施すこととなつた。これは実に養和元年（一一八一）勅定によつて大勸進職に就いてから丁度二十三年目の事で、時に重源年八十三歳であつた。

以上若干の重源の経歴を記したことによつて、彼が事業を経営するに當つて如何にその弄精魂に専心傾倒していたかの消息を窺うことが出来ると考えられるので、次に『南無阿弥陀仏作善集』に於ける慈善救済の事績について述べることにする。

社会福祉のための事業

重源が一生の中最も多くの努力を傾注したものは、寺院堂塔の建立

であつて、東大寺造営の如きは最たるものの一であり、其の外仏像の造立・修復も決して少数ではなく、大小の木像・石像併せて五十三体の多きに及んでいるが、是等は直接社会福祉のために寄与したといふわけではないけれど、仏法興隆の本質的のものと云えば、当然社会福祉の増進ということになる。然し今は一応是等のものを除いて直接社会福祉に関するものだけを取り挙げることにする。第一に挙揚すべきものは湯屋の建立と湯船・釜の施入のことである。

即ち東大寺・上醍醐寺・東大寺別所・高野新別所・伝法院（？）^{註④}・波辺別所・播磨別所・周防南無阿弥陀仏・伊賀別所・備前国府・豊原庄豊光寺・善通寺（？）^{註⑤}・興福寺・光明山・鎮西廟田ハカタの十五ヶ所であり、その大部分が造東大寺料や東大寺領内に在り、尤も備中別所は斯う云つた関係はないが、或は在宋中の榮西の友情に報いるため、その出身地を選んで、一東大寺造営と深い関係の下に為されたことではなからうか。殊に東大寺別所・波辺別所・播磨別所・周防南無阿弥陀仏・伊賀別所・備前国府・豊原庄豊光寺等の中には、所謂七堂伽藍を具えていないものもあり、重源の造東大寺のための事務所として置かれたものもあつたことであろう（小林剛博士述俊乗房重源の肖像について『仏教芸術』23参照）から、その全部が庶民温浴のために利用されたものとは断定出来ないが、その多くは庶民のために利用し得られる様に運用されたものと考えられる。

而して是等の湯屋並びに釜等の施設については、湯屋一字というのがその大部分であり、中には東大寺・上醍醐寺・伝法院、波辺別所、備前国府の如き大湯屋があり、又中には興福寺・光明山の如き湯屋の見

えないものもある。施設としては湯船・釜であり、鉄湯船は主として東大寺・上醍醐寺・伝法院・渡辺別所・高野新別所の大湯屋に限り、之には必ず釜が併せて考えられて、可成り規模の大きい浴場が経営されたものと考えられる。伝法院の釜の如きは「口径八尺釜卅石納」と見えて^{註⑥}いる。斯うした浴場が如何様に利用されたかについては「在常湯」というのが、東大寺別所・播磨別所・豊原庄豊光寺・鎮西廟田であつて、備前国府の「不断令温室」というのも、おそらく同様に常時浴場を開いて温浴を利用せしめていたことであろう。（温室に用いた風呂釜は、総社市阿曹で鑄造されたものと思われる点があり、目下調査研究中である。）

次には諸国に土木事業を起して、諸人の利便を図ると共に、地方振興のために尽力したことである。即ち撰津国の渡辺橋・長羅（長柄）橋に結縁し、山城国の清水寺橋近江国の世多（瀬多）橋の架橋にも協力し、又建久七年六月官に乞うて撰津国魚住泊・大輪田泊の港湾の修築をも為し遂げている。因に当時の太政官符には

太政官符 撰津国司

応任東大寺大和尚重源申請知識、不論神社仏寺、権門勢家、庄園公地、全
伐用造築魚位太輪田泊等石椽、并一州小島料材呵木竹等、点進津津破捐船
瓦、兼雇役河尻辺在家人人事、

右得重源去四月廿八日奏状備、重源敬稽旧記、魚住泊者、天平之昔
行基菩薩所建立也、弘仁之間破壊年久、天長九年依故右大臣清原真人
奏状、殊降敕旨、早冷作治、自承和末、廢而不修、貞観九年東大
寺僧賢和伏請天裁、更致修固、不終其功、空以入滅、延喜年中清行

朝臣雖上報事、未及管築、浜岸弥頽、兆域遂亡、每至雲陰月暗風星
稀、莫不落帆弁楫、東呼西叫、因茲近世山陽南海西海三道公私之船
十之八九居然漂没、於是彼泊住人近辺僧侶等數曰、此泊之為体也、
非當舟船失利之憂、遂有人徒損命之悲、自非上人誰救此難、請任旧
跡早企新功、且是行基菩薩勸衆庶人、成東大寺、碩德之余修此泊、
情見當時之次第、盍躡天平之蹤跡者、重源且發大願、且依宣旨、東
大寺大仏殿南中門等纒雖建立、其余堂舎未造已多、廻何秘計支此大
營、再三雖辭遁、縑素尚固請、若奪其志奈菩提何、仍慙以然諾試相
勵、其上大和尚田泊者、古今之間、或雖修復、二十年來石椽頽廢、
風波相突舳艫易迷、河尻一州者、洪濤漫万里無岸、広瀉沿四面受
風、既來而欲入河尻、不待而空沒海底、二所之煩蓋又如此、既謂普
濟何弁此所、況手慙之趣更出絲綸哉、然猶貧道之身、更無獨營之
力、勤進之行、恐少同心之人、是以、殊被宣下、欲唱智識、其用度
一者不論三道諸国、并神社仏寺権門勢家庄領、運上米内斛別一升可
分得之、一者修築之固欲用舟瓦、彼三道国衙者、一郡別一艘、庄園
者一所別一艘、可被死召之、即自其本所各欲被送者、一者和泉、撰
津播磨、備前、備中、紀伊、伊勢、淡路、讃岐、阿波等十箇国、津
津浦浦并河尻淀津等、破損之船多以有之、各可令点之、一者山城、
河内、撰津、播磨、淡路等五箇国、不論庄公、材科料木并竹等可令
伐用之、兼又撰津、播磨、淡路三箇国、并河尻在家等者、修復処所
已得便宜、各雇人夫欲令使仕、惣而言之、雖似一旦之煩費、豈非万
代之勝業、上奏之旨必垂哀矜、望請天慈、上件条々、被下宣旨令遂
修造者、忝誇聖主授予之仁、將休庶民咽嘆之愁者、右大臣宣、奉

勅、依請者、国司宣承知、依宣行之、符到奉行、左中弁藤原朝臣右
大史三善朝臣

建久七年六月三日

と見えて事の如何に重大視せられて慎重に配意されたものかを窺い
知ることが出来、殊に魚住泊については「彼嶋者、昔行基并（菩薩）
為_レ助_レ入築_三此泊_一、而星霜漸積、浸_三損波浪_一、然問上下船遇_三風波_一、
漂死輩不知_三幾千_一、仍逐_{道カ}并（菩薩）聖跡_一、欲_レ復_三旧儀_一、」といひ、
また河内の狭山池を修築しているが、此の時にも同じく「河内国狭山池
者、行基并（菩薩）旧跡也、而埋壞崩既同_三山野_一、為_三彼改復_一、臥_三石
樋_一事六段云々」と見えて居り、重源が如何に行基の蹤跡に従うこと
に無上の感激と決意を以て当つていたかを窺い知ることが出来る。

次には又備前国・伊賀国等の道路を修築し、往還の難渋を救つてい
る。即ち「備前国船坂山者、自昔相_三交縁陰_一、往還人或愁惱、或失_三
身命_一、仍勸_三進國中貴賤_一、切_三掃彼山_一、成_三顯路_一、永留_三賊難_一、」と
し、或は又「伊賀国所々山々切掃、往反人令_三平安_一」、又「同国道路
最惡之故、往還人馬其煩多、或付_三損害_一、或死亡、仍為_レ助_三彼等_一、
嶮惡所々悉作直、止_三人畜歎_一」と見え人命救助のための主旨がその根
本であつたことが見える。

此頃又農業経済の逼迫と、技術の進歩に伴い、重源も又莊園の開發
にも預つて力があり、備前国野田庄以下数箇の莊園が東大寺領として
管理・經營された。『東大寺統要録』所收の建久七年（一九六）十一
月三日の宣旨によると、重源の請によつて、朝廷は備前国野田保を以
て、同国散在の東大寺燈油田に代へて不輪租とせられた。それは建久

四年（一九三）備前国内に散在した荒野二百六十町歩を開發して、
東大寺の燈油田とすることを請うて許され、一・二年にして開發の工
を竣へた。然し諸郷に散在しては管理・經營にも不便があるの
で、これ等の燈油田を一反国に返上し、その替地として一箇所にまと
まつた野田保（後に野田庄という）を東大寺領とすることを許され
た。この野田庄は『備陽国誌』等によると、今の岡山市の野田・島田
・高柳・西長瀬・田中・辰己・中仙道に相当する。即ち同市の南西地
方の一帯であつたようである。とにかく、こうして野田庄は鎌倉時代
を通じて、東大寺にとつては重要な莊園であつた。

又中世に於て同じく東大寺領であつた備前国南北条・長沼・神前かんざき
の三庄も、重源の努力によつて東大寺領となつたものであつた。南北条
は建久八年（一九七）六月十五日の重源讓狀の記事によれば、開發
の許可を得ると、彼は巨多の奉加米等を出して種子料に充てて開墾を
施した程の土地であつた。『吉備温古』によるとこの南北条は今の西
大寺市内となつている邑久郡の新地・門前・五名・川口・浜・新・別
所・乙子に跨る地域で、旧の豊村から太伯村に互り、この地域は吉井
川が兎島湾に注ぐ川口の沖積平野であつた所から、彼の着目する所と
なつて開發されたものである。長沼・神前（神崎とも言う）の両庄は
東大寺が開發したのであり、開發者の名は明記していないが、前後の
文意によつて、南北条と同じく重源の功によるものと考えられる。長
沼庄は現在の邑久郡邑久町長沼を中心とする一帯の地域で、神前庄は
今西大寺市の一部となつている邑久郡太伯村神前を中心とする一帯の
地域である。

是等の四箇庄が、少くとも鎌倉時代の終まで東大寺領であったことは、東大寺文書に散見する史料で充分之を知ることが出来るが、かくまに備前国の海岸が重源によつて開発されたということは、彼の本意が東大寺造営ということ許りではなく、或はそれを為し遂げるために民衆の生活を顧慮して、生産の増強をも忘れなかつたということも窺い知ることが出来る。(藤井駿教授述「岡山県に於ける俊乗房重源の事跡」参照)

この外死刑囚の減刑助命を図つたことについては「決定可_レ被_レ頭_レ」首人申免事十人」と見え、重源の慈心悲腸は遂に囚人をも見逃がさなかつたことを物語つた一齣として挙揚すべき事績の一と云わねばならない。註⑦

尚『本朝高僧伝』には「周防、長門二州飢荒、源捨_三私財_二救活存撫二州之民、感_三其德惠_一、以_三米千斛_一、歲寄_三東大_一。」と見え、重源は周防、長門の飢饉に際し、私財を以て之を救済したがために、両国の人々が其の徳に感じて毎年千斛づつを東大寺に寄進することとなつて居り、『作善集』に見える「施行少々」は夫等のことを指称しているものと考えられ、又『沙石集』の「盲目の母養事」等も重源としては有り得べきことであつたであろう。

重源の一生は念仏修行のための前半世と、造東大寺のための後半世と大体二つに分類することが出来るとしても前後を通じて一貫しているものは只管仏制に委せて「後世をおもはんものは糖鉢瓶一ももつまじきもの」とこそ心えて候へ。」と清貧を重んじ、勧進の財と否とを問わず一切を献げて仏法興隆・庶人福祉のために貢献せざるは無く、実

におそろしい程崇高なる思想精神によつて終始した誠実敢為の傑僧であつた。

重源の社会福祉思想

重源は若くして上醍醐寺に入つて密教を修め、後又高野山に参籠して専ら仏法修行に傾倒し、又一面には源空に従つて只管浄土往生を希求したとは云え、彼は決して多くの著述をものして一派の教学体系をうちたてた学僧ではなく、専ら民衆を勸化教導する教化僧であつた。

そして又聖道門の密教に従うと雖も、易行門の不断念仏を以て自家の拠点とし、教相^{註⑧}によつて教える所を忠実に然も熱心に行動実践する所の事相家を以て終始した。鎌倉時代に於ける道元・親鸞・日蓮がそれであつたと同様に、重源も亦日本仏教固有の伝統の中に於てでなければ其の本質をとらえることの出来ないものであつた。

『作善集』に見える所の重源の行実を点検してみると、密教・浄土・華嚴の雑然たる信仰要素が窺われるのであるが、それがたとえ高野山や上醍醐に居住して仏法修行に専念し浄土信仰に熾烈であつたとは云え、既成の一宗一派に偏しているものではなく、従つて源空流の専修念仏・不断念仏ではなく、寧ろ真言・浄土信仰の混合型態と見ることがその真相に近いであろう。殊に彼の師資關係の明らかでないものがある事等は、勧進僧重源の信仰型態として注目すべきことの一であり、従つて重源が力を傾注した常行堂念仏は単なる源空の不断念仏ではなく、円仁(七九四—八六四)のとつた「三七夜欲_レ修_三不断念仏_一。延彼三七日夜之本願_レ為_三三世常行三昧_一。念一称不_レ為_三世間之利_一。一花一香唯志_三往生之因_一。」(『灌鴈抄』)す所の夫れではなかつたのではな

ろうか。

重源が最も敬慕し信仰を献げて思想的に深く影響があると思われるものは、上醍醐寺に浄名居士（維摩詰）窺基（慈恩大師）達磨の影像を安置し、太子の廟に阿弥陀仏を安置して御堂を建立したことや、橋寺の行基画像を修復すると共に、行基の聖跡を追うて魚住泊を修復した事の外、曼荼羅と共に聖徳太子、鑑真和尚、行基、空海（おそらく画像であろう）を常に身に随えていたこと等に於て、聖徳太子・維摩詰・行基・空海の先蹤を追うことに重点をおき、是等の人の社会福祉に対する思想を以て自分の思想とし、夫等の人々の蹤跡を自らの行実の軌範、準繩として努めていたものと考えられる。又求法精進のためには仏法を中国に伝来した達磨、玄奘と共に訳経に従事した窺基。海賊風波等幾多の困難を排し十一年の歳月を経て入朝し、一時東大寺に居り後唐招提寺を開創して、我国最初の和和尚に補任（重源は鑑真の次に大和尚となる。）された鑑真等も亦忘れ得られぬ存在であつたであろう。斯くして重源の持つて産れた性格は、是等の人々の思想・行実によつて愈々深く且広く練成されて来て、「聖」であり且「支度第一」の後乗房が出来上つたのである。而して又彼の周囲には源空・貞慶・西行文覚・栄西等があり又後白河法皇・源頼朝・九条兼実の如き協力援助者もあつて事業の上には思わぬ苦勞もあつたが、又一面内面的には何時も充実した平安に恵まれていたことと想われる。

『作善集』が重源の自筆のものであるか如何かについては確認されないにしても、彼の一生を窺うための唯一の確実な史料であることだけは間違いがなく、其の他に彼の思想を究明することが出来る何等

の著述もないので、勢いこの一本を中心として研究するより外に途はない。然し前項に於て述べた様に彼が最も敬慕していた聖徳太子・行基・空海等の包懐していた思想というものは、学問的にどれ程というわけには行かないにしても、重源の人間像は間違いなく之によつて形成されたものと考えることが出来る。従つて又その社会福祉思想は是等の人々と同様に非常に広範囲且広義のものであつて、足らざる所を補うことを以てその本体とし、又其の先蹤に従つて社会全体の便利を図り、産業を奨励して常に住みよき社会の建設のために努力した。周防国の材木現場に於ける臨時的応急の救助、又は盲人の母を養う少年の救済、或は死刑囚の減刑助命の如き、若干の個々の救済を除いて―然もこれも全体に対する部分として把握していた。

―殆んど全部がそれであつた。釈尊の入滅から弥勒仏の出世迄身を六道に分つて一切衆生を済度し、しかる後に成仏せんと誓つた地藏菩薩の石像を伊賀の新大仏寺に発願建立（『作善集』）し、或は又身を三十三身に現じて衆生の所有に苦難を済度した観世音菩薩を讚嘆供養するために、東大寺に於て普門品を誦誦（『遺立供養記』^{註④}）したことは一般の通儀に従つたにしろ、重源の真意は紛れもなく観音のはたらきを理想の人間像として把握したものと見ることが出来る。之を行実の上に於て見るならば、大阪の渡辺橋を始めとしての架橋又は修復、魚泊其の他港湾の修築、狭山池の改復、備前・伊賀等の山の切開、道路の修築湯屋の構築修復、湯釜の設置さては周防・長門に於ける飢饉の救済の如き地藏の誓いであり観音の願いであつた。又昭和三十年頃和泉国に於て重源自筆の金光明最勝王経が発見されたが如き、真偽の程は明確で

ない（昭和三十一年五月小林剛博士談）にしても、彼としては有り得ることである。金光明経の伝来は日本書紀編纂終了の直前に伝来（西田長男博士著『日本に於ける宗教思想史の研究』参照）し、持統天皇八年には始めて金光明経百部を諸国に置いて毎年正月上弦に之を読ましめ（『濫觴抄』上）^{（四十三）} 其後最澄が法華経・仁王経と共に鎮護国家の三部経として取り挙げるに至つて、護国の経典としての社会性を生じた程のものであるから重源の眼にとゞかぬわけもなく、わけて彼の重大関心事である所の東大寺が、聖武天皇発願以来鎮護国家を本旨としてたち別名を金光明四天王護国寺とする所からしても、異常な関心と感激とを以て写経したであろうことも考えられる。

とにかく重源は特異の経歴が物語っている様に、一定の教学大系はうち立てなかつたにしろ聖徳太子・行基・空海等古聖先徳の行実を範とし、自ら之を具現して社会の福祉増進に努めようとする固い信念の下に終始し、又一方密教になづまず浄土に流れず、毅然として之等の混合態である不断念仏を以て自ら任じ、然も尚且当時浄土教教団が多く、の抑圧を被りつゝある時であるにも拘わらず常行念仏を高らかに掲げて民衆勸化の實を挙げ、極めて困難なる東大寺復興の大事業を完成せしめたことは、高遠にして且現実的なる思想のないもの、到底成し遂げ得られることではない。殊に奈良朝以来の伝統を根強く蔵する東大寺の復興に當つて、その創意工夫になるものとは云え、宋国の文化を積極的に輸入し、建築は斬新な天竺様を採用し、剩え大仏の如き当時の貴族の一人雅頼をして「自昔御面相ハ一定令劣給え様見給候き」と評さしめ（毛利久述東大寺復興における重源と奈良仏師『重源上人の研究』所收

参照）る程おそらく宋風の顕著なものであり、或は中央地方の寺院造営に、將又安置・施入等する所の画像・経卷等に多くの唐本を用いる等是等のことを敢て実行した重源の新らしいものに対する理解とその建設の意欲が如何に深く潜んでいたかを考え、行実と思想との関連の深いことを理解しなければならぬ。

註

- (1) 高橋梵仙博士著『日本慈善救済史の研究』第三分冊俊乘房重源の慈善救済事業には十三歳とし、『重源上人の研究』所收の略年譜には十二歳としているが、今は『浄土寺開祖伝』により十三歳に従う。
 - (2) 『元亨釈書』には「仁安三年」とするも、今は『重源上人の研究』所收の重源上人略年譜『高僧伝』等に從つておく。
 - (3) 『作善集』の中に「阿弥陀仏名付、日本国貴賤上下事（建仁二年二始之）とあるが、建久三年には快慶も安阿弥陀仏と自称したらしく建仁年中頃迄の作品にも好んで阿弥陀仏号を署名している（毛利久述『東大寺復興に於ける重源と奈良佛師』二重源上人の研究』所收参照）所から見ると、建仁二年に始めて之を用いたものではなく、建仁二年は之を始めてから二十年になると解すべきではなからうか。そこで日本国貴賤は別として、重源か阿弥陀仏号を唱名の機縁助成のために世間に流布せしめたのは、矢張り建仁二年（一一〇二）を遡ること二十年の寿永二年（一一八三）の頃（毛利久 前掲書）と考えられる。
 - (4) 又聖人は安元二年二月重源の勸進にかかる高野山延寿院施人の鐘銘に「聖人重源」と見えている。
- 『作善集』の高野新別所（号専修往生院）の条首行に「湯屋一字」云々とあり、末尾に又「湯屋一字」云々と見えて居り、おそらく之は同一の事

を指しているものと考えられ、又次に「本寺大湯屋」云々とあるが、之は本寺専修往生院という意ではなく、次の行に「伝法院」と云々と書き込みがあるので、おそらくは本寺は伝法院を指しているのではなからうかと想う。伝法院は長承元年(一一三二)―又大治五年(一一三〇)とする―寛鳥の建立したものであつて後、勅願寺となり当時金剛峯寺と同等の寺格を以て扱われていた程重要な寺で然も新義真言を称えた革新的空気に充たされていたものである。

(5) 明らかに善通寺ということではないが、『作善集』の記事の読み下しの上から斯う見るより外に途がないので一応斯うしておく。

(6) 東大寺の釜は口径七・六八尺高さ二・四九尺で容積十八石入とされ、防府阿弥陀寺のそれは口径六・一二尺内径五・一二尺深さ三・三七尺であつて、伝法院(?)の釜より稍々小さい。(拙著『岡山県下に於ける慈善救済史の研究』参照)

(7) 本項は高橋梵仙博士著『日本慈善救済史の研究』第三分冊を参照する所が多い。

(8) 当時高野山に於ては純粹な真言密教許りではなく、殊に高野聖に於ては専修往生を以て専念し「自元法界ノ地ナル上ニ不断念仏ヲトナヘテ一片ニ往生極楽ヲ願フヨリ外ノイトナミナシ」(『発信集』)と云われた程であるから、重源の高野山參籠は専ら往生浄土に依拠するものであつた。

(9) 地藏と観音の信仰は、一応一般的信仰の対象となつていゝものであるから重源の特に之を讃嘆供養した事の理由はないかも知れないが、地藏、観音菩薩は何れも現実の世界、人間、生活を理想化しようとする所に如何にも重源的と観られる点があるので、敢てこの説を爲す所以である。

主なる参考文献

- 文学博士辻善之助著『慈善救済史料』
南都仏教研究会編『重源上人の研究』
文学博士高橋梵仙著『日本慈善救済史の研究』
龍肅著『日本新文化史』「鎌倉時代」
其他